

「義経伝説の真相」アレコレ

増山雄三

悲劇の英雄だった事もあって、源義経の伝説は、多くの武将の中でも最も多くあって、「義経記」をはじめ、御伽草子や幸若それに謡曲のほか、歌舞伎から近世の赤本や黄表紙に至るまで、多くの題材を提供してきた。

そしてそれらは、日本人に「判官鼻眞」の意識を定着させ、彼の歴史的事実が分らぬままに、生涯の悲運は多くの伝説を生んだが、風采は上がり、母の素性も分らないので、生まれも卑しかったし所領も無かったとはいえず、平家討伐に功あって英雄になった。

それでも、兄の頼朝に追放され、哀れな最期を遂げた事から、これを惜しむ事で多くの伝説を生まれたが、後の、平家討伐の際の鶴越えの逆落としやとか、八艘跳びの敏捷な戦略や行動の伝説に、それが照応している。

その幼少時に、鞍馬寺での修行時代の義経を、歴史の舞台に引きだしたのが、蒲田正義の子だった少進坊で、四条の金連寺が時宗道場だった事から、義経伝承には、この時宗教団が大きく関与していた事が分る。

こうして、源平合戦で活躍した彼が、多くの創作話とともに、悲劇の英雄として多くの文献に数多く登場するのは、主に室町期からだが、全校で港が整備され、各地に残るその伝説が、海運によって京に伝わったのだ。

それで、義経の多くの伝説は、江戸時代になくなって、浄瑠璃や歌舞伎とか講談で庶民に広まり、明治期には、義経が大陸に渡りチンギス・ハーンになったとの話も生まれ、それは、日清・日露戦争の影響とも思われる。

それで、一の谷の合戦で、義経は手勢を連れて、急激な崖を馬で下る鶉越の逆落しで、平家軍に大勝したと伝わるが、奇襲したのは別の武将で、義経はそれに加わっていなかったという説が、いま注目されている。

それでも、義経ほど伝説に彩られ、そして今も人気のある武将もいないだろうが、彼は東国の武士の棟梁で、「鎌倉殿」と呼ばれた兄である頼朝のために、平氏と戦って勝ったが、最後はその兄に追討され、自害に追い込まれた。「悲劇の英雄」だからだ。

それで、源平の戦いなどを描いた「平家物語」は、史実と思えない話も多いが、近年、当時の貴族の日記である「玉葉」や、他の史料を基にした研究が進んでいて、史実と伝説の境目の部分が、徐々に分ってきた。

「源義経」などの著書がある、中世史が専門の、五味東大名誉教授は、それは、義経が京都、奥州、鎌倉、一ノ谷、屋島、壇ノ浦などの各地に、多くの足跡を残したので、時代や地方によって、彼への思いを重ねる人たちが、史実を脚色したのだろうと話す。

義経は父の仇だった、平清盛を討つため、幼少期は山中で天狗に兵法を学び、京の五条で刀狩りをする弁慶を破って従者とし、壇ノ

浦の戦いでは、舟から舟への八艘跳びを演じて、最後は奥州に生き延びて大陸に渡り、チンギス・ハーンになったという言葉伝説だ。

このような伝説の多くが生まれたのは、鎌倉期ではなく、平家物語の影響が濃い軍記物語の、「義経記」が成立した室町期以降と考えられ、この時期には、京や上方と各地を結ぶ海運が、盛んに行われていた時期なので、全国の情報に届くと、各地での義経に関する伝説も集まってきた、それが文献に反映されたのだろう、と五味氏はいう。

その中で、力持ちで忠義に篤い弁慶や、戦に敗れ夫を失いながら強く生きる常盤御前、それに義経と惹かれあう静御前、また父が奥州で義経を匿った藤原秀衡などもいて、物語としては、これ以上の配役は無いだろう。

義経が奥州から、北海道の蝦夷地に渡ったという伝説もあり、江戸初期の一六七〇年、林春齊の「続本朝通鑑」に紹介されて広まったが、幕府が十七世紀始め、松前藩にアイヌ

民族との交易を認めため、江戸の庶民にとつて、蝦夷地が身近な存在だったのだろう。義経記は、江戸の浄瑠璃や歌舞伎、それに狂言とか読本にも取り入れられ、悲劇の英雄伝説は流布し、この時に先に話した、大陸に渡りチンギス・ハーンになった、という説も生まれたが、それは日露戦争で、大陸への関心が高まった事が背景にあったからだ。一方、義経の功績とされる、各地の戦いの中にも、通説を覆す説が表れ、中でも注目されるのは、平氏に大勝した一の谷の合戦で、絵巻物にも描かれる「鶯越の逆落し」に、義経は加わっていないかった、という説だ。平家物語には、一の谷の北側にある、鶯越えの急な崖の上から、馬上の義経が手勢を率いて奇襲をかけ、平氏軍を破ったとされているが、今ではそこを旧神明道路が貫通し、車が通行しているのでよく分かるが、その場所というのは、十^キ以上も離れている。

それで、平家物語の説明とは違っているの

で、いささか不審に思うが、当時の平氏軍は福原に陣取っていて、源範頼軍がいる東の生田口と、義経軍がいる西の一の谷口が、平氏軍の守備の要になっていた。

それで、一の谷口は義経が破ったとされるが、「玉葉」には鶯越の奇襲を実行したのは、地元の摂津源氏の武将である、多田行綱と書かれており、地図もその布陣だったという。

それで、義経研究に詳しい国学院大学の菱沼教授は、「地理に明るかった行綱は、福原の背後にある鶯越が、平氏軍の急所だと知っていたのだらう。陣の背後を突かれた平氏軍は、東西の守りがおろそかになって崩壊したが、こうした作戦は、義経の指揮で決行された可能性が高く、それが、鶯越逆落しという伝説になったのではないか」と話している。

ところで、いまNHKで放送されている、大河ドラマの「鎌倉殿の十三人」は、俳優の菅田将暉さんが義経役を演じているが、三谷幸喜の脚本は、史実に近い義経像が描かれて

いると評判が良い。

源氏が天下を取るために、命がけで戦ったのに、兄である頼朝に評価されない義経は、後白河法皇の策略で、兄弟の絆が引き裂かれて、結局は兄に追討されてしまうという、難しい役を菅田さんは見事に演じた。

それで、時代考証を担当する一人である、長村祥知富山大学人文学部講師は、「ストーリーは制作サイドが決める事だが、一の谷や屋島それに壇ノ浦の戦いで、短期決戦を主張して、非情な勝利至上主義を取った事や、女性との恋愛が多彩だという面などでは、義経の実像に近いと感じた」と話している。

それで、番組では武士の時代が確立するまでの、血腥い話が続く中で、頼朝や北条政子らが、まるでコントのように掛け合いをするシーンが、不思議な笑いを醸し出しているという、笑いとシリアスさを両立させている、素晴らしいドラマになっている。

令和四年七月